

V 評価作業を終えて

前回改定から 10 年という短い期間の自然環境の変化について多くを語ることは困難ではあるが、以下に、評価作業を通して感じた現在の東京都本土部の自然の状況を概括的に述べる。

山間部におけるニホンジカの採食による下層植生の消失は広範囲かつ顕著に進行しており、その影響は植物のみならず、山地性チョウ類をはじめとする昆虫類、小型哺乳類、鳥類などさまざまな生物相にも及んでいるものと見なされる。この現象をもたらしているニホンジカの高密度化と分布拡大は、西多摩・南多摩におけるツキノワグマの分布拡大にも示されるように、狩猟や林業など人間による自然に対する働きかけの低下や集落人口の減少などが大きな要因となっており、長きにわたり維持されてきた地域の生態系バランスは大きく変化する可能性がある。

農業や薪炭材の採集など人々の生業や生活によってきめ細かく手入れされ、多くの生物を育ててきた多様な環境を有する里山も、産業構造の変化と市街地の拡大整備に伴い既にその多くが改変されてきたが、その傾向は今なお継続しており、谷戸の消失や乾燥化、水田や水路、畑や草地などの減少が進行している。河川や海岸沿いもその大部分が整備され、自然のままの瀬や淵、砂礫地や湿性草地、自然海岸や広大な干潟などを有していた多様な水辺の姿は大きく変化している。

かつて存在した自然に対する適度な人間の働きかけの停止、市街化の進行による緑の減少や分断化、稠密化した市街地の整備に伴う環境の単純化などの結果として、野生生物種の生育、生息環境は厳しさを増しており、多くの種において絶滅危惧のランクは高まった。植物や昆虫類、陸産貝類などの評価結果からは、東京の温暖化や乾燥化を示唆する傾向もうかがえる。

他方、東京の自然環境の回復の兆しやポテンシャルを感じさせる事例も確認されている。河川では、長年にわたる下水道整備の進展に比例して河川水質が著しく向上しており、環境維持用水の確保等のさまざまな取り組みも奏功し、中流域から河口域の淡水魚類や、水辺の昆虫類等が回復していることが報告されている。ラムサール条約湿地となった葛西海浜公園の東なぎさは、人工的な造成地でありながら、干潟からヨシ原までの多様な環境が連続して存在しており、甲殻類や貝類、それらを捕食する鳥類などの貴重で安定的な生息場所となっている。

改定作業前には、かいぼり事業による井の頭池のイノカシラフラスコモの復活という、明るイトピックが届けられた。今回の改定作業の中で行われた現地確認調査においても、多摩地域では都内初確認となるガ類やコウモリ類が発見されている。上述したツキノワグマの分布拡大は自然の回復傾向と考えることもできる。区部では長期間その存在が確認されていなかったカヤネズミが河川敷で再発見され、保全されている湧水地では大規模な淡水藻類の群落が残存していることが確認された。

東京は 1,000 万人以上の人口を抱える世界有数の大都市でありながら、都心部に皇居や明治神宮などの緑を有するとともに、市街地にも公園緑地という形で大規模な緑を確保してきた。多摩川をはじめとする大小多くの河川、多摩丘陵や狭山丘陵といった丘陵地の緑を經由して、関東山地や関東平野、東京湾とのつながりも確保されている。

それぞれの生物には、それぞれ生存にふさわしい環境が必要である。今後、東京の生物多様性を回復させていくためには、緑の保全や拡大のみならず、こうした東京の地形の成り立ちやつながり、緑と水のストックを活かしながら、かつての環境の多様性や連続性を、時間をかけて回復していくことが求められよう。

今回の改定作業も、前回同様 2 年間という極めて短期間で行われたが、限られた時間と不足する情報の中で十分な評価作業が行えたとは言い難い。次回改定に向けては、評価精度を高めるために必要な、情報収集に関する調査体制の充実や適切なスケジュール確保が望ましい。

また、作業中、東京の生物の事情に精通した研究者や地域の愛好家が急速に少なくなりつつあり、東京の自然環境に関する暦年の変化の記憶や専門的な知見、かつての東京の自然の姿の記録である東京都産の生物標本などが消失、散逸の危機にあると、多くの委員から重ねて指摘があった。今後、何らかの手立てを講じなければ、遠からずレッドリストに係る情報収集や評価が困難となってくることが予想され、環境アセスメントをはじめとする東京の自然環境行政に重大な影響をもたらすことが危惧される。

野生化した外来種による捕食、販売目的の採集、マニアの写真撮影等による環境かく乱、他地域産個体の安易な導入による在来個体群との交雑や置き換わりなど、人の行為が在来の種や個体群の存続を危うくさせているケースも増加している。生活者一人一人に対する理解促進と配慮行動に関する働きかけも必要である。

長期的な視点に立ち、東京の自然や生物に関心を持つ人材を育成し、東京の生物多様性保全を底辺から支えるとともに、多くの都民が身近に自然に親しむ環境づくりに取り組み、都民意識を向上させていくことが、東京が真に自然と共生する都市となるための重要な鍵となる。

(検討委員一同)